

「世界のたね～自然のなかに真理がある～」企画展によせて

日吉の森庭園美術館 キュレーター 田邊陵光

毎日食べているコメを“種（たね）”と認識して膳を囲んでいる人はどのくらいいるのだろうか。日本、アジアだけでなく全世界的に大切な食糧となったコメ。それは別名“舍利”（シャリ）とも呼ばれ、仏や聖者の骨を表す。形状が似ているからという説だが、それだけではなく人類にとって貴重な食糧であるがゆえだと考えられる。そして“種（たね）”は食べるだけではなく、人類を飢餓から救う遺伝資源なのである。

2014 年 1 月に病に倒れ、2015 年 3 月にこの世を去った彫刻家 田辺光彰はその生涯を芸術に捧げ、自身の作品を通して人類の生存をかけた動植物の多様性と重要性を訴え続けた。中でも“WILD RICE（野生稲）”の IN SITU CONSERVATION（自生地保全）をテーマとした作品を中心とし、創作活動を行ってきた。野生稲の遺伝子はすべてのコメの原点であり変化に富み、現在のコメが温暖化や病気などで収穫が減った場合、この野生稲の遺伝子からそれぞれの災害に強いコメが作りやすいという特性を持つ。その野生稲の自生地が開発により危機に晒されているのを保全するのが目的であった。

田辺は抽象彫刻家であった。初期の作品は広場や人と彫刻の関わり合いを考えたいいわゆる抽象彫刻でモチーフの無いものが多い。1979 年、彫刻の森美術館主催の第一回ヘンリームーア大賞展での準グランプリ、ジャコモマンズー特別優秀賞を受賞した作品※1 が代表される。しかし、1980 年代後半から“粃”（もみ）という言葉が作品に登場するようになる。粃だけでなく豆、菜の花、芽軸など自然と関わり合いの深い言葉が作品のタイトルに使われ、題材となってくる。多くの作品が展覧されているが、そのうち四つをこの場を借りて紹介したい。

タイの首都バンコクから車で一時間。パトム・タニ地区の大学の研究施設近くに広大なコメの研究機関がある。国立パトム・タニ稲研究所である。モニュメントの設置 20 周年記念式典に昨年（2017 年）招待された。広々とした研究のための水田に沿って 33 メートルの巨大なオブジェが威容を現していた※2。その大きさゆえ、説明がなければ、それを一粒の小さな野生稲がモチーフだと直ぐに思い当たる人はいないだろう。“何だろう？”という問いかけも、後述する重要な要因の一つだと考える。現地の人たちはとても気さくで、私が来た事をとても喜んでくれ、そして口々に彫刻のすばらしさと田辺を失った損失を語ってくれた。田辺の作品集の中に、タイのシリントーン王女が親しげにドローイングを眺めている写真がある※3。タイの人々には大変人気がある王女であるが、この渡泰でその写真の持つ意味を肌で理解することができた。多くの研究者たちは、その探求する能力で人類の発展に寄与してきた。しかし一方でその難解な研究を大衆に向けて発信する力に乏しいことを認めている。このタイのケースも当初、田辺が王女に野生稲の遺伝資源の重要性を訴えたと宣言

すると研究員たちは口々にそんな事は到底無理だと論じたが、結果はこの写真が示すとおり野生稲自生地保全計画は王室肝いりのロイヤルプロジェクトとなったのである。一見人類の存続や自然科学の発展には縁のない芸術は、その激しいメッセージを内包した作品を通して広く大衆に受け入れられ、モチーフである野生稲の大切さを理解させる存在となったのである。芸術には我々の心を豊かにするだけでなく、強い人類への愛情や生存に対する凄みをみせることが出来る。この作品はまさに研究者の目的が反映されその役割を十二分に果たしているといえる。“何だろう？”もパブリックリレーションにつながる彫刻の持つ力なのである。

田辺はまたフランスのモンペリエにあるバイオバーシティインターナショナル国際生物多様性センターにも野生バナナの種子をモチーフとした作品を収めた※4。多様性が叫ばれている中、生物の多様性のみならず種子の多様性にまで思いを馳せる姿が見える作品である※4。身近な果物であるバナナもコメと同じく人類にとって大変重要な食糧である。我々が食べているバナナは株分け、つまりクローン栽培のため次世代につながる種子を持たない。これは同一の品質、大きさ、生育スピードなどをそろえて生産効率を追求した産物である。しかしこのことは同時に 2016 年に発生したフィリピンでの被害のように、同じ種類の病気や害虫によりすべてが全滅してしまう危険性を同時に抱えている。田辺は 2007 年頃から、台湾の野生のバナナを観察し、その危惧に警鐘を鳴らすべく稲のシリーズと並行して野生のバナナにも注目し作品を創作している。野生のバナナは種を持ち、環境に強い性質と遺伝子を持つ。

田辺最大の作品を含む彫刻群がオーストラリアのダーウィンから約 150 Km、カカドゥ国立公園への途中に位置するマウントバンディエリアにある。2014 年、病に倒れる前の 13 年に亘り毎年一か月以上現地に滞在し、地表に露出した巨大な赤御影石の表面に、時には手彫りで、また時にはグラインダーを使い様々な造形物を作り出してきた。そこには、蜘蛛、蟻、トカゲ※5、花、そして野生稲など 10 点の大きなレリーフが現れる。中でも 82m に及ぶ野生稲の彫刻は見るものを圧倒しその存在意義に思いを寄せる※6。オーストラリア北部は純粋な（商業的な現在我々が食べている米と野生稲が自然交雑し純粋な野生稲遺伝子がアジア圏では失われつつある）野生稲の自生地が残っているためにこの場所が選ばれた。このプロジェクトの始動時に田辺は日本のオーストラリア大使館職員に、現地に残る純粋な遺伝子資源の重要性を説いたところ、大使館の文化・芸術部門ではなく農業部門に通され、変な人が来てしまったと戸惑ったことを、後に田辺を理解し協力者となってくれた元大使館員中村氏は懐かしんで語った。

今回の企画展に際し田辺光彰美術館から貸し出し、展示されている彫刻の中に北極のスヴァールバル諸島にあるジーンバンク（農業関係の種子・遺伝子保管庫）※7 の中に永久展示されている作品と同型の“THE SEED 2009・MOMI-IN SITU CONSERVATION”がある。作品自体は小さいがその人類の存続を危惧し作られた”種子のノアの箱舟“に同乗する作品として激しいメッセージを放っている。このジーンバンクについては、他で詳しい説明があ

るのでここではあまり触れないが、核戦争や隕石の衝突、現実味を帯びてきた温暖化による大規模な気象変動、こういった状況が発生した場合残された人類がこの箱舟に保存されている種を使用し、再び農耕を行い生き延びていくというコンセプトはSF映画さながらである。しかし、実際に人類の食にふりかかる幾多の災厄はフィクションではなく、その状況に抗うことのできる遺伝資源の確保も人類の存続と密接に影響するものだという信念の現れをこの保管庫からは感じることができるであろう。

この企画展に田辺の作品が参加できたことは当美術館にとって喜ばしいことだと考えている。世界から飢えを一掃すべく種子（遺伝子資源）の保存に尽力したベントスコーマンの信念を作品から感じていただけたら幸いである。

田辺光彰は横浜市港北区に生まれ、2015年に他界するまで、町の変化や失われていく動植物を危惧し続けていた。光彰の作品は国内だけにとどまらず世界各地で展覧されている。国際的に活動する中、自身の故郷にも多くの作品を制作しその考えを残してきた。現在、田辺光彰美術館のある日吉の森庭園美術館では残り少ない市街地の森と横浜市認定歴史的建造物となっている築160年に及ぶ古民家などで構成され展示されている。この美術館は光彰の最後の作品としてその理念や表現を伝えている。（了）

参考文献

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 『Mitsuaki TANABE 田辺光彰』 | 野村太郎編著（株）八坂書房 |
| 『地球最後の日のための種子』 | スーザン・ドウォーキン（株）文藝春秋 |
| 『タネが危ない』 | 野口勲（株）日本経済出版社 |
| TED より『種を通じて食料の未来を守る』 | キャリーフォウラー講演 |

日吉の森庭園美術館 hiyoshinomori.com



※1 混在（あ） 1979

※2



MOMI 1997(WILD RICE)-IN SITU CONSERVATION



※3 MOMI-野生稻

※4



THE SEED OF WILD BANANA 2013

※5



蜥蜴（トカゲ）

※6



MOMI-2010

※7



種子保存庫エントランス